こしやの光

法華經の巻

前　篇

彌陀の活現なる釈迦佛陀……一

八相応化……六

後　篇

法華経三周の説……一〇

譬喩品……一三

信解品……一七

方便品……二〇

譬喩品……二二

信解品……二三

薬草喩品……三一

化城喩品……三六

法師品……四〇

見宝塔品……四〇

提婆品……四一

寿量品……四八

彌陀の活現なる釋迦佛陀

日は已に西に沒して地は一面に昏くなりぬれど、東の山の端に皎々たる滿月は地上を照しぬ。我等心眼なくして如來無量光を知見すること能はざれども世界に出たる大聖釋迦佛陀の德光の赫々たるを聞いて彌陀の實在を信ず。吾人は信ず彌陀は宇宙靈界に輝く太陽、此土の教主釋迦佛陀は是彌陀の人格活現なることを。無量壽經の序文に其意義を示し玉へり。

釋迦佛陀彌陀三昧に入り給ふは、佛陀の心中彌陀と合一し入我々入、釋迦の身心に因つて彌陀の靈光を現はせり。

文に曰く、爾時世尊諸根悅豫し奏色清淨にして光顏巍々たりと。此佛陀の表情が無限の神秘的要素を含藏せり。其內容には宗教意識の眞髓を圓滿に含藏せるものと信ず其深意ある聖旨を承けたる弟子のアナンの言に於ていよいよ其消息を洩されたり。卽

ち曰く、今日世尊諸根悅豫し奏色清淨にして光顏巍々たること明淨の鏡の影表裏に暢るが如し、威容顯曜にして超絕し給へること無量なり、未だ曾て殊妙なること今の如くなるを見奉らざりき。釋尊の聖容の表情斯の如く殊妙なる、釋尊の照々たる心の鏡に彌陀の慈智の露光映現し、入我々入、釋尊の精神卽ち法身法量光の實現なり。彌陀現の釋尊なれば內面に充滿せる露光卽ち聖容に現れしものである。

然れども外面に現はれたる表情のみにては其內容無邊の靈德を含蓄することを示しがたし。ここに於て彌陀不可思議の靈德の光は釋迦の全精神に顯現することを阿難の言を以て語らしめ給へり。彌陀の靈德の光がいかに釋尊の聖意に實現せるかを對照して示さむ。

今日世尊奇特の法に住し。　彌陀の淸淨光が天尊の六根に現はれ身心ともに淸らかに佛眼乃至佛身意淸淨なること心鏡の表裏に暢れり。

今日世雄諸佛の所住に住し。　彌陀歡喜光と融合せる天尊の感情、入我々入、大我の中に安住し、自受大法樂を受く。

今日世眼導師の行に住し。　彌陀の智慧光の顯現たる釋尊出世の本意、衆生をして佛知見を開示し佛の正道に悟入せしむ。

今日世英最勝の道に住し。　天尊の聖意卽ち自ら彌陀無上の最上至善の道德に安住して。

今日天尊如來の德を行じ給ふ。　如來の德たる、一切衆生をして自己と同じく無上道に攝せんとの爲に、常恒度生の活動を現ず。

斯の如きの現相は人佛釋尊の身によりて彌陀の靈光現なることを尙重ねて明されたり。

去來現の佛、佛と佛と相念じ給ふ。今の佛も諸佛を念じ給ふことなきことを得んや。何が故ぞ、威神の光々たる乃ち爾るやと。佛々相念とは人佛の釋迦と法身無量光との融合、日光が月に現はるゝの謂である。また諸佛とは卽ち彌陀は三世一切諸佛を總

合せるの尊體なれば無量尊といふ。今釋迦佛陀が無量尊を念じ、その明鏡心に彌陀の靈光活現したるなり。

佛陀言く、アナンよ、汝が言はるゝやうに實に然り。法身無量光は無盡の大悲を以て三界を憐れみ、故に今人佛釋迦として此世に出で、彌陀の光を宣べ傳へて群萌を拯はんと欲し、惠むに眞實の利を以てす。實に此眞理を聞くことを得るは容易なる幸にあらず。すべての人民の心を開きて光化せしむ。アナンよ能く聞かれよ。彌陀の活現たるこの佛陀正覺の智は本無量光の顯現なれば、實に無限の泉より出づ。而してよく世を導くこと極りない。いかなるものも此眞理の光のみは遏絶することは不能である。

アナンよ、人佛釋迦は嘗に團食のみにて活げるものでない。彌陀の靈喰を以て靈なる命を住ましむるのであるから、無量永劫決して靈なる身根心は衰ふるものではないそは佛陀は常に三昧によりて彌陀と合一し彌陀の智慧と相應すればなり。喩へばよく磨ける金剛石はよく日光を反射するごとくに、金剛なる定と慧とは彌陀の靈光を映射するの德を有するものである。然らば彌陀の靈光はいかにして受くべきぞ。これを受くるは定と慧とである。定は三昧に入りて心水湛然として彌陀の靈光をとゞめ、慧は深く彌陀の秘藏を開きて自己に現はす。佛陀は定と慧とによりて彌陀と相應し、また彌陀を活現し給へり。此文に示せる敬祖の聖意はすべて彌陀を信念する衆生の爲に範を示し給へるなり。故に吾等彌陀の光明によりて永遠の救を求むるものは、宜しく敬祖の芳躅を習ひて自己の身心は是彌陀の靈光を容るる器として、常に信念をすゝまれんことを希ふ。

八相應化

大恩教主釋迦牟尼佛
常寂光に在まして
智悲の光りは極みなく
迷へる人を救はむと
初めに菩薩は雲井なる
天地よろづの民草に
地上に出てはかびらえの
時をえらみてたましひを
四月八日ののどけさに
降誕ます聖子の初聲は
よろづのよきこと遂るてふ
まどかに具ふる相好は
學びの園にのぞみては
伎藝の林にあそびては
富は四海のかぎりなく
四方の遊びにあだし世の
人の倫とて妹と脊の
いとむつましき間のとに
上なき道の得まほしく
乾渉馬王に御されては
深山の雲を分け入りて
自らみぐしをのぞきては
三身一如の法の身は
よろづの德は圓かなり
照さぬくまもなかりける
八相應化の迹を垂れ
としたの内の官居にて
めぐみの露をそゝぎてし
すとだな王を父とはし
摩耶の母胎に降します
ラビニの園生の花の下
天と地とにひゞきしと
シタルタ君とは名けらる
梵仙あしたうごかしし
五明四吠陀の花をめで
奥義の室にぞ入りしとや
またなき幸福の身にませど
常なき相をさとらるる
ちぎり深くもヤソタラと
み子のラゴラをあげしかど
きさらぎ七日の夜半の頃
ひそかに宮を出ましぬ
玉のかざりをぬぎすてつ
法の衣にめしかへぬ

千里のかみすをふみわけて
解脱の道を討ひしかど
尼連禪河のほとりなる
つぶさに苦行をつもりてはこがねの流に沐みては
乳糜の供養をうけしにぞ
伽耶の畢鉢羅の樹の下に
結ぶあなうらおごそかに
天つ魔羅がふき起す
みそらさやかに照します
臘月八日の後夜の更
はしなき無明の夢さめて
覺れば自然のねはんなる
すべての人類をすくひてぞ
高嶺を照らすあしたより
示しましぬる迹高く
金の言の華は榮え
光顏長にうるはしく
三輪完全のみかゞみは
應化の迹はクシナなる
まことは久遠實成の
常に淨けき靈界に

あらゝうどらの仙人に
意を得まさで立ちさりぬ
みどりの草のむしろにて
六たびの春を經にけらし
牧家の女難陀波羅が
頓にちからを回復し
金剛座上のこけむしろ
靜かに三昧耶に入にける
もゝのいかづちむら雲も
月にはさはりあらざりし
明星ほのかに出し時
靈の覺醒とはなりけらし
ときはの都は開かれて
きよきみ國にみちびかん
雙樹の夜半の終まで
聖旨に開く法の花
身にむすびてし威儀は
巍き威は極みなく
われらに模範を垂ませり
つるの林にかくれしも
無量壽尊にましませば
利益度生の極みなし

法華三周の說

法華經は釋尊出世の本懷を顯はす、敎を受くるに機類に上中下の三根あり、上根の人は法を聞いて、釋迦出世の本懷は一切衆生各自が本具の佛性を開きて諸佛と等しく正覺を得しめんと欲する處にあると云ふ眞理を聞き如來の聖意を得て我も佛性具する故に之を開示する時は我も佛と成り得らるゝと會解したるは、舍利弗一人にて、次に佛と衆生とは本來父と子との關係を、長者の父とまた子との譬喩を以て我等本佛の子なれば、釋尊と同じく成佛し得らるゝことを信解して記別を受けたが四人である。次に因緣を以て、過去無量劫に大通智勝佛世に出て衆生を敎化し給ふ。其佛未だ國王たりし時の十六王子あり、皆俱に父に隨て菩提心を發して我等成佛せば十方の一切衆生を度せんと。……

法華三周の大意

法華經に釋尊出世し衆生敎化の本懷は一切衆生を悉皆成佛せしめんとするにあり。同じ佛敎にても權大乘にては三乘の法を以て悉皆成佛を示す。三乘の法を以て得道せしめしは方便にて實は一佛乘に歸し以て衆生を悉く成佛せしむるにあり。

敎を受る方の衆生の機類同じからず、釋尊の本意を全く領解して眞實の信解が決定して成佛の記別を受くる機類に三種あり上中下根是なり。上根は法を聞いて釋迦出世の本懷を了解し中根は譬喩を以て信解し下根は因緣を以て領解す。今法華三周の說を略して大意を述べん。

初法、釋尊は無上の正覺を成して一切諸佛と等しく諸法の實相を究盡し給ふ。實相は如是相乃至如是本末究竟等、諸法の實相とは要を取りて云はゞ、一切衆生の心に地獄より佛界に至る迄の相性乃至十如三千の理法が本末具有して居る。衆生に十界の性

能が具して居る故に、佛と成り得らるゝ性を有つてゐる。

要を云はゞ衆生に佛と成り得らるゝ性が潛在して居るは唯佛と佛との（　）覺なし給ふ故に諸佛の法は衆生をして同一の成佛を期せしむるなり。然れども方便して初めに三乘の法と說きしは衆生の欲樂を滿たしめんが爲である。故にそは方便說である。實際の本懷は諸佛世尊は唯一大事の因緣を以ての故に世に出現し給ふ。一大事因緣とは諸佛世尊は衆生をして佛知見を開き淸淨を得せしめんが爲にまた衆生の佛知見を開示悟入せしめんが爲に世に出現し給ふ。

故に如來は但一佛乘を以て衆生を敎へ給ふが本意なので三乘敎を說のは方便である故に諸の衆生は諸佛に從ひて開法すれば究竟して一切種智を得べし。故に諸佛は但菩薩を敎化し給ふ故に十方世界中尙二乘なし何況んや三あらんや。如來は但菩薩のみを敎化し給ふことを知らざれば此佛弟子に非す。諸佛出世但此一事、衆生を引導して佛智慧を說かんが爲如來は實相印を說く。一切衆生をして我の如く異（ること）無からしめんが爲と。

一切衆生悉有佛性、若有聞法者、無一不成。佛の法を聞いて舍利弗尊者一人眞理を領解して歡喜に耐へず、便曰、我昔諸の菩薩の授記作佛を見て謂ひたりき。我等は何故に斯事に預らざりしと。自ら如來無量の知見を失へることを傷しみき、然るに今日世尊の說を聞て始めて如來の眞意を解したり。我等も必ず成佛得ることを。今日乃知眞に是佛子、佛の口より生じ法化より生して佛法の分を得たり。曾つて羅漢の滅度を證したるは實の滅度に非ず。若我作佛せば一切諸佛の如く異ること無けん。我定めて作佛して、諸の天人師の爲諸の菩薩を敎化すと。舍利弗が無上菩提心を起して記別を授けらる。無量劫の後成佛して華光如來と名づけ離垢淨土に。

譬喩品

如來は方便說法は皆衆生を成佛させんが爲である。今更に譬喩を以て此義を明し給

豈悅ばさらんや。

舍利弗よ、云何、此長者が等しく諸子に珍寶の大車を與へること寧ろ虛妄なりや。舍利の言く、否、世尊是長者が子らを火難を免れ其身命を全からしめることが虛妄でない。何を以ての故に若身命を全うすれば已に玩好の具を得たのである。況んや方便して彼火宅より拔濟なされしをや。世尊よ若長者が縱令最小の一車だも與へぬからとて救濟の爲なれば虛妄でない。況んや子らに等しく大車を與へたるに於ておや。舍利弗よ如來亦復一切世間の父諸の怖畏衰惱無明の中に於て無量知見力無所畏大神力及智慧力方便波羅蜜具足し大慈大悲常に懈怠なく恒に善事を求めて一切を利益す三界の朽敝たる火宅を出るは衆生を度せん爲め生老病死三毒の火を度せんが爲敎化して阿耨菩提を得せしめん爲に諸の衆生老病死の憂悲苦惱に燒かれ亦吾欲の財利の爲めに種々の苦を受く、貪着追求して現に衆苦を受け、後に地獄等の苦を受け六道患苦なり。

舍弗よ、彼長者初三車を諸子を誘引し然してのちに大車の寶物を以て莊嚴第一なるを與ふ。如來も亦如是、初めに三乘を說きて衆生を引導し、然る後に大乘を以て之を度脫す。

衆生の小根にして遠かに三界を出て涅槃を求むるが聲聞乘、是諸子の羊車を求めて火宅を出るがやう。また衆生自然慧を求め獨善寂を樂ふ。深く諸法の因緣を知る之を緣覺乘と名づく。彼諸子の鹿車を求めて火宅を出るが如し。若し聞法一切智佛智自然智如來知見力無所畏を求め一切の衆生を愍念し安樂にし天人を利益し一切を度脫す、之を大乘と名づく。之を菩薩と爲す。諸子の牛車を求めて火宅を出づるが如し。

信解品

須菩提、迦旃延、迦葉、目連は佛の未曾有の法を聞き世尊が舍利弗に成佛の記を授るを聞て希有の心を發し歡喜踊躍して恭敬合掌して佛に白し上げぬ。我等は弟子の中に首、年老朽自ら涅槃を得たり無上覺を求むるに及ばず、自ら空無相無作を樂つて菩

ふ。譬へば一の國に大長者あり。其年老衰して、財富無量、田宅及諸の僮僕あり。其家廣大、唯一の門あり。百二百の人其中に止住す。堂閣朽故已に傾危に逼る。俱時に歘然と火起つて舍宅を焚燒す。長者の諸子二三十、此宅中にあり。長者は大火四面より起るを見て大に驚怖し、諸の子等が火宅の内に於て嬉戲に樂着して覺らず、或は墮落して火に燒かれん、我當に說いて火に燒るゝことを免れしめんと具に諸子に告ぐ、汝等速かに出でよと。父憐み善言を以て誘ひ諭すと雖子等は嬉戲に樂着して肯て信愛せず、驚かず畏れず了に出ん心なし。又何らか是火ぞ何らか是舍たるを知らず、但東西に走戲れて父を視て已んぬ。時に父の長者大に惱み、此舍已に大火に燒るも、我諸子を誘つて出ですんば必ず燒かれんと。我今方便を設けて子等が爲めに斯宅より救はんと。父は此子等が各其好む所の種々珍玩奇異の物を與へば必樂着せんと。卽ち告て言く、汝等が好む所の希有にして得難き物を與へん速に之を取れよ、若し疾く取らざれば後に悔あらん。此やうに種々の羊車鹿車牛車が今は門外にあり。出てゝ戲遊はゞいかゞ。汝等此火宅より速に出でよ。汝らに欲するまゝに與へてやろうと。爾の時に子等は父の說きなさる珍玩の物ありと聞き大に其の願に適ひ各互に競うて勇み進んで火宅を出た。是に長者は諸子らが無事に出るを見るに四衢道の中に露地に坐して大に歡び躍つてゐる。して諸子等は各父に白さるゝは父よ先きに許し給ふ珍妙の羊車鹿車牛車を願くは我等に賜與し給へと。時に長者は各子の好に任す。一の大車高廣にて衆寶を以て莊嚴を施し、四面に鈴を懸け其上には寶蓋を張りまた寶華瓔を垂れ蜿蜒と敷き丹枕を置く。駕するに大白牛の最肥肉の充富なる形體の大力の强き步行の速なる而して多くの僕從が併衞せる。

本來是大長者財寶富無量珍寶充溢してゐる。是く念ふ我財物極りなく下劣な小車を子等に與ふるに及ばぬ、此幼童は皆吾子である、愛に偏黨はない。我に是やうな七寶大車が無量有す。平等に此を與へて差別はなし。此物を縱令一國に與へても匱ことなし、況んや諸子をや、其時子らは各大車に乘りて未曾有なるを見て本の所望に過たる

薩法の遊戲神通淨佛國土成就衆生の事は心に喜樂せざりき。何となれば我等は已に三界を出で涅槃を得今は年已に朽邁故に佛か菩薩の無上覺を求むる志は起らざりき。然るに今我らが佛前に於て聲聞に阿耨菩提の記を授るを聞いて心大に歡喜自ら慶幸に大善利を獲。實に無量の珍寶求めざるに自ら得、世尊よ我等今譬喩を以て吾等が信解の義を述べた。譬へば人あり年幼稚にて父の家を逃出して久しく他國に住し二十年五十年に至る、年已に長大に窮困して四方に馳せて食を求む。漸く遊行して遇本國に向ふ其父先來子を求めて得ざりき其家大に富む財寶無量金銀寶石等倉庫に充滿す。多く僮僕臣佐吏民又象馬車乘牛羊無數、出入の商估賈客亦多い。時に窮子諸の聚落を遊歷して遂に其父の城に到りぬ。父子を念ふ、子と離れて五十余年、來た人には說かされども自ら思惟して悔恨を懷けり。自念ふ我老朽して財物多く充溢すれとも之を讓與すへき子息なし。一旦沒すれば財物失して委付する所無い。切に其子を憶ふ、若し我子に遇ふことを得ば此財物を委付して大に安心を得ばいかに幸ならんと。

時に窮子が傭賃展轉して父の舍内の側に立ち、遙に其父が座寶几により諸の婆羅門刹利等が皆恭敬し圍繞して身には眞珠寶石を以て莊嚴し吏民が白拂を執つて其容嚴なり。窮子が父の大勢力を見て大に恐怖を懷き此に來るを悔ふ。竊かに念ふに、此れは或は王なるか。我らが傭はれて物を得るの處に非す、往いて貧里に到りて衣食を得るに如かじと或は逼迫し强いて我を使役せられん。是念ふて疾く走て去る。時に長者が座牀に在りて子を見て便ち識る、大に歡喜し我財物悉く付せん。我子是に來る、我意に適す。我年朽ぬ。傍人を遣して窮子の疾走し往くを還らしめんとす。窮子驚愕して怨なりと稱して大に叫び、我犯さじ何を捉捕する。使者强牽いて還らんとすれば窮子自念ふ我罪なし執へられて必ず死なんと。轉々惶怖絕地に躄る。父遙かに之を見て此人を强て將來する勿れ卽ち冷水を面に灑きて醒悟得せしむ。父其子の下劣なるを……

方便品

爾時世尊三摩耶より
尊者舍利子に告ます
其智慧の門甚深く
一切聲聞緣覺の
いかにとなれば佛は
諸佛に親近して
勇猛精進に行じては
甚深未曾有の法を
機宜に應じて說給ふ
我成佛してより已來
廣く言敎を演傳へ
普く衆生を引導し
いかにとなれば如來は
悉く皆具足せり
無量無礙、力、無所畏
深く無際にさとり入る
如來は種々に分別し
言辭柔輭
概して云はば如來は
法を佛は悉く
止みぬよ舍利弗我法は
佛の成就す妙法は

安祥として起給ひ
諸佛の智慧は無量
甚だ難解難入
窺ひ知ること能はじ
百千萬億無數
諸佛無量の道法を
名稱普く聞
圓かに皆成就して
深意甚だ知り難し
種々の因緣譬喩に
無量の方便もうけては
諸の著を離れしむ
方便智見波羅蜜
如來知見深遠に
禪定解脫三昧も
一切未曾有の法を成就せり
巧に諸法を說明し
衆生の心を悅ばしめ給ふ
無量無邊未曾有なる
圓かに成就し給へり
妙にてまた說くべからず
希有にして甚だ解し難し

唯佛と佛とのみ
謂ゆる諸法の如是相
如是力、如是作
如是報、如是本末究竟等

譬喩品

三界火宅すむ身は
衆の惱みちみちて
常に生老病死の憂患
凭るすべてを燒く火
唯如來のみひとり
いと長閑なる園生に
今此三界悉く
其中にある衆生らは
されども此處は安からず
唯我ひとり子らが爲め

諸法の實相を究盡
如是性、如是體
如是因、如是緣、如是果

安らけきことなく
實に怖るべき處
燒るに止むときはなし
三界の火宅を離れては
寂に安くまします
皆是我有
悉く是吾子なり
すべての患難のみ多し
救護して休む時もなし

信解品

我等今日佛の敎を聞き
佛聲聞常に作佛す
譬へば童いとけなく
諸國に流れて五十年
頓に一城に止りて
其家富て財多く

歡喜自ら耐へざりき
無上寶得たるなり
父を逃れて他土に入り
其父四方に求めける
舍宅を構へ自ら娛む
金銀寶石充溢す

象馬車乘
出入商賈賈人等
常に王者に愛せらる
豪富大の勢なれど
夙夜に死時至らんに
此財寶を何にせん
時に窮子衣食を求めんと
得其身を支ふこと難く
漸次に經て過くに
備貨を求めて展轉
長者は門内に在り
寶坐にありて嚴しく
或は金銀計算し
窮子は父の尊嚴を
我等が使役す處ならず
或に逼迫驅使されん
備作活業營まん
遙に我子と識りぬれば
窮子を追ひ捉來れよ
迷悶氣絶地に倒る
必す死免れじ
彼が愚痴下劣
卽ち方便
眇目煙陋威なきもの

二四

僕從臣民數多なり
千萬群り圍繞せり
群臣豪族に重せらる
年朽只子を憂ふ
痴子我を捨てゝ五十年
諸國の（宿を追）れては
飢餓にせまりて羸瘦りぬ
父の住む城に到る
父の舍に至りぬ
大寶帳を施せり
眷屬圍繞
注記券疏出入財産
是國王と謂もひにき
若しも久しく住しなば
疾く此を去り貧里にて
長者は高坐にて
便ち使者に命しては
窮子は驚き怨と喚び
此人我を捉へなば
長者は子の意を察し
我父なりと知らぬ
更に余人を遣しぬ

二五

貧子に語るに
糞穢を掃除し
子は聞き喜來りて
長者は牖より
長者は弊垢の衣を着
子の所に往到れり
足に油を塗りぬ
汝當に勤作せよ
長者に入出
家事を執り
猶門外に處し
父子の心漸く
諸親族に
此大衆の中にして
家を逃れ他に行る
こゝに來りて二十年
周行求索此に來ぬ
一切財寶之に對し
子念昔貧し
父の所にて珍寶と
歡喜未曾有と
佛亦斯の如く
汝等我に等
我らに無漏の法を說き

二六

汝よ長者に備はれて
汝に倍して賃與へんと
不淨掃除
子の愚を
除糞器執り
語令勤作
飲食充足席煖
また汝は我子の如し
已に十年經にける
金銀寶出入示しける
自ら貧しく財物無しと謂ふ
廣大なるを知り
國王大臣刹利等
是我子なれば幼にして
五十年を經にける
昔某城にて此子を失ふ
凡我所有舍宅
其所用に任せんと
志意下劣にて
一切の財物を獲し
我等小乘を樂む故
作佛說給はず
小乘聲聞弟子（　）無上の說を說き

二七

我らに作佛
種々因緣譬喩
諸佛子我法を聞てより
時に諸佛記を授け
諸佛祕藏の法
我らが爲に眞要說かず
すべての財寶知ぬれど
我ら佛無上法聞とも
我は自ら足れりと謂
我らは淨土と度生と
一切諸法空に
喜樂を生せさりし
貪着志願なく
是究竟と謂ひにき
三界苦患を解脫し
有餘涅槃に住し
菩薩の法を說き
絕へて願樂せざりき
初大法を勸めざる
方便して心を柔伏して
佛亦是の如く
小を樂ふものゝ爲め
乃ち大智を敎へます
求めざるに自得せり

我ら大菩薩
若干言辭と無上道を說き給ふ
日夜思惟し勤習し
未來作佛すと
但菩薩に說示す
窮子の父に近けば
心に悋取せず
自ら願はざりし
唯無漏と餘なし
都て歡樂なかりき
寂無生無滅無漏無爲是のみ
我永く佛智には
自ら小乘無爲
我は永く空を執し
已に最後身に住し
我らは曾て佛子等に
佛道を求めよと聞しかど
導師我を觀給へ
長者の子志劣
後に一切の財物を付す
希有の事を現じては
方便して心を調伏し
我今日未曾有
窮子無量寶を得し

世尊我道果を得
法眼淨を得たり
今始めて果報を得
今無漏大果を得
佛道を一切に聞かしむ
世間天人魔梵ら
世尊大恩希有事
無量劫に期し難し
一切供報能報はじ
恒沙劫盡心恭敬し
恒沙劫に供すも
諸佛希有不思議
能下劣の爲に
諸佛は法に自在をう
勸ふる所に隨ふ
衆生宿世善根の
種々籌量分別し給ひて

藥草喩品

無上法王世に出てゝ
如來尊重智深く
智ある者は信解せん
迦葉よ隨力爲說
迦葉よ譬へば大雲の

無漏の法
我等永く戒を持ち
法王法中修行
我ら今眞聲聞
我ら今眞羅漢
普く供養を受に應す
我等を誘て敎化し
手足供給し頭禮し
若し兩肩荷負し
美膳臥具種々衣服
廣大大恩報じ難し
大神通力無漏の法
取相に說きましぬ
衆生種々の欲樂に
譬喩說法す
熟と不熟を知らしむ
一乘を分つて三を說く

隨類種々の法を說く
秘要は容易に說きまさず
無智は疑悔して利を失す
種々緣もて正見を
徧く世間を覆ふては

雷鳴電光雨降し
日光掩ふ地は涼
雨は平等に下
山川險谷に生にける
百穀苗稼甘蔗等
地は洽て樹は茂り
草木は隨分受潤しぬ
大小に隨つて長成す
一雨に鮮澤
等潤各滋茂す
譬へは大雨普く
分別說法要を說く
一切衆生に宣言す
世間に出て大雲の
離苦安穩得せしむと
諸天人衆善く聽けよ
世尊に及ふものなし
大衆に甘露の法を說く
一妙音に義を暢べ
我一切平等に
貪着限礙なく
一人の如く衆に然り
去來坐立疲厭せず
貴賤上下戒

衆を悅變せしむ如く
纖雖垂布攪る如く
流澍率土に洽し
卉木草大小樹
雨に潤ひたる
雲は一味の水降らす
諸樹上中下等
根莖枝葉花果色
大小體に隨つて
佛もしかく世に出て
既出世諸衆生に
大聖世尊は天人
我如來兩足尊
一切の枯槁潤すごと
世間及涅槃
皆應に無上尊を覩よ
衆生の爲めに世に現す
一時解脫涅槃
常に大衆に緣を作す
彼此愛憎の心なく
一切平等說法す
常恒說法佗事なし
世間雨の普潤て
威儀の具不に拘らず

正邪利鈍擇ばず
衆生我法聞く者は
或は人天轉輪王
無漏法涅槃
獨處山林常禪定
世尊所作佛
諸佛に專心佛道

藥草喩

決定無疑是小樹
無量百千衆を度
佛平等　味雨
草木所稟異の如く
種々言辭にて法を說
法雨世間に充滿し
籔林草樹の
諸佛一味法
漸次修道果を得
最後身に得果す
諸菩薩智慧堅固
是小樹增長す
諸法空を聞大歡喜
是大樹增長を得とす
大雲一味の雨をもて

法雨を雨して懈倦なし
力に隨ひ諸地に住す
釋梵諸王是小藥
神通及び三明をう
得緣覺中衆草
行精進上藥草
常行慈知作佛

安住神通不退轉
如是菩薩是大樹
衆生性所受不同
佛は喩て方便
佛智海一滴は
一味法隨修行
大小各異に繁茂
世間に普及
聲聞緣覺山に處し
藥草增長すと名
了達三世求上乘
復住禪神通力を得
無數光衆生を度
迦葉よ佛所說法
人花を潤實を成す如く

迦葉よ諸の因緣　譬喩を以て開示す　三六
是我方便諸佛と同じ　今汝等に實事を說く
諸聲聞滅度せず　汝等所行菩薩道
漸々修學當成佛

化城喩品

往昔大通智勝佛　十劫道場に坐りて
佛法現前せざりしに　修羅衆等天華を雨らし
諸天天鼓伎樂作し　香風花を吹
十劫經て成佛　諸天世人歡喜
彼十六王子眷屬と　千萬億佛所に至
頭面禮して請法輪　聖師法雨を一切に
世尊甚値ひ難し　久遠時に一現
群生を覺悟す　東方五百萬億國
梵宮光曜未曾有　諸梵佛所に來
花を宮殿に供養　請轉法輪讚嘆す
佛時未至知請を受默然坐　三方上下亦然り
散花し轉法請じける　世尊甚た値難し
大悲廿露門を開かせ　無上法轉
世尊衆の請を受　四諦十二緣を宣
無明乃至老死等　衆過患を知ぬべし
此法時六百億　盡苦羅漢をう
第二說法時　千萬恒沙羅漢をう
從是後得度者無量　萬億算數及ばず　三七

十六法王沙彌等　共大法を請じ　三八
我等從當成佛し　世尊第一淨の如
佛童子宿命を　無量因緣譬喩もて
六度及神通眞實法　菩薩所行道を說
法花恒沙の偈を說　佛說經已りて
禪定一心一處にて　八萬四千劫
一々沙彌　佛禪未出を知り
衆生の爲に說法　各々大乘經を說
佛宴寂後　法化を助て
一々沙彌度す衆生　六百萬億恒沙衆
彼佛滅後に聞法の衆　互に諸佛土にあり
常に師と俱に在　十六沙彌は成佛し
現在十方成正覺　爾時聞法者
各諸佛の許にあり　聲聞に住し佛道に向
今釋迦牟尼十六　曾亦汝等說
先れば昔の緣により　法花成佛の法を說
譬へば道迥絕し　道に毒獸多く
無數千萬衆　此險道曠遠と
五百由旬を經　一に道師あり
導師に白さく　我ら今頓乏
此より退還と欲　導師は愍む
退き珍寶を失ふ　方便神通にて
化して大城廓と成り　莊嚴諸舍宅
園林浴地溢りて　重門高樓閣　三九

男女皆充滿す　化城成りて衆に告ぐ
汝等此城に入り隨所樂　衆人心に歡喜

法師品

化すべき處の四部の弟子　比丘と比丘尼と
清信士女を使はして　法師に供養せしめては
有ゆる衆生を引導くに　あつめて法を聞しめぬ
若し人惡しき刀杖や　瓦石を加ふるものあれば
變化の人を使はして　卽ち衞護したまふなり

見寶塔品

時に寶塔中より　大音聲をいだしては
世尊の聖法を讃給ふ　能くは平等大慧敎
善哉善哉と釋尊に　妙法蓮華經をもて
菩薩法佛所護念　如是々々
大衆の爲に說給ふ　皆是眞實
世尊所所說の妙法は

提婆品

我過去刼をおもふ　大法を求めん爲にして
世の國王となりけるも　五欲樂を貪ざりき
鐘を推て四方に告ぐ　誰か大法有するもの
君我爲に解說せば　奴僕に成て仕へんと
時に阿私仙　王の許に來りて

我微妙の法有てり　世間の希有なる
若君能修行し給はば　汝が爲に說ぬべし
王は聞いてより　いたく喜悅の心を生じ
仙人の爲に種々の　所須を供饌して
薪を採り果を拾ひ　蘇を採て供しける
恭敬尊重して止まず　情に妙法を得ん爲に
身心懈倦を忘れにき　唯大法を勤求して
已が身とまた五欲との　快樂の爲に露もせず
されば大國王と成り　勤求しては妙法をえて
遂に成佛するをう　今故に汝に告ぐ
爾時の王とは我身なり　仙とは今の提婆なり
提婆達多を知識とし　我に六度四攝法
三十二相八十種好　紫磨金色十力四無畏
四攝十八不共法　神通道力を具足せり
等正覺を成じては　廣く衆生を度すことは
皆是提婆調達が　善知識によるからに
されば提婆調達は　今より無量刼ののち
當に成佛するをえて　天王如來尊と號し
世界を天道と名く

文珠師利のたまはく　我大海の中にして
唯ひたすらに妙法　蓮華經を宣說す
智積菩薩　文殊師利に問けるは
此經甚深微妙にて　諸經の中の寶にて

最も世にも希有にして
衆生勤加精進し
速かに成佛をうるや否や
娑竭羅龍王の女
智慧利根にして
陀羅尼を得
諸佛所說甚深の
深く禪定に入り
刹那の頃に道心を
辨才無碍にて
猶赤子のごとし
心に想ひ口にのべ
其性慈悲深く
深く菩提に志し
智積ばさつのいひけるは
無量の功を積かさね
功を積み德を累ねては
未だ曾て暫らくも
三千世界を見るに
菩薩の身命を捨て給ふ
凭は衆生の爲にとて
疑らくは此女
便ち正覺を成せしと
時に大龍王の女

（頗有衆生）
如說に修行する時は
文殊師利の曰はく
今年八歳
衆生諸根の業を知り
秘藏をすべて受持し
諸法を了達し
發して不退を得たり
衆を慈念すること
すべての功德具はりて
實に微妙廣大
意志和雅にして
我釋迦尊を見奉るに
難行苦行
菩提の道を求めて
休止し給ふこともなし
乃至芥子許りだも
處にあらぬなかりけり
行じて道を成じます
須臾の間に凭
言論未だ訖らざるに
忽ち前に現はれて

頭面に足を禮敬し
頌をもて讃して曰く
深く罪福の相に達し
微妙に淨き法身
八十種好をもて
天人戴仰する處
一切衆生の類
聞て菩提を成ずこと
我大乘の敎を聞き
舍利弗龍女に語るらく
無上道を得と
いかにとならば女の身は
いかに無上道を得ん
無量劫を經て
行を積みて度を修し
又女人の身には
一に梵天王
三に魔王四轉王
然るに女の身ながら
時に龍女
價三千界に充つ
佛卽ち受給ふ
もうされけるは
世尊納受したまふこと

卻て一面に住しては
徧く十方を照ます
三十二相具はりて
法身を莊嚴し
龍神も咸恭敬す
宗奉せざるものはなし
唯佛のみ證知
苦の衆生を度せん
汝久しからずして
是事實に信じ難し
垢穢にて法器に非ず
佛道甚だ曠
有ゆる勤苦
然して後に成佛す
五障のあり
二に帝釋天
五に佛身得ざるなり
いかで成佛得しならん
一の寶珠あり
持て佛に奉つる
龍女智積と舍利弗に
我今寶珠を奉つる
疾とやいかにと問ひけるに

答て甚た疾かりき　　女のいはく汝らが
神力をもて我成佛を觀ば　　これよりも速なり
當時の衆會　　龍王が忽の間に
女子の身を變じ　　菩薩行を具し
便ち南方無垢の世界　　寶蓮華に坐し
等正覺を成じては　　三十二相八十好
普く十方一切の　　衆生の爲めに妙法を
演說しける

壽量品

我本佛を得てよりは　　經たりしところの劫數は
無量百千萬億載　　阿僧祇にも過きたりき
常に妙法を說き宣べて　　無數億の衆生等を
教を施し化をたれて　　佛のみちに入らしめぬ
爾してより已來無量劫　　衆生を度せん爲めにとて
方便して涅槃を現しても　　實には滅度し給はず
常に住して說法す　　我常に此に住ぬれど
神通のちから……

昭和六年五月二十五日印刷
同　五月二十八日發行
誌代年貳圓（郵稅共）
編輯兼發行人　山崎辨成
印刷人　東京市小石川區小日向臺町三丁目　春山治部左衞門
發行所　東京市小石川區水道端二ノ四四　ミオヤのひかり社　振替東京六六八五一番